

「シンポジウム」

## 記念碑からみる二二八事件における「族群和解」

鈴 木 哲 造

はじめに

二〇一七年二月二十八日、台北市内にある二二八和平公園の台北二二八紀念碑前において、二二八事件七〇周年の記念式典が催された。式典の主題は、「時代は眼前にある 二二八70」である。ここには、二二八の経験が自らの土地を愛する契機となり、さらには台湾主体意識の啓蒙の源となる、という企図が込められている。式典には、蔡英文總統をはじめ、薛化元二二八事件紀念基金会董事長、柯文哲台北市長、潘信行台湾二二八關懷總會理事長及び受難者の家族らが参列した<sup>1)</sup>。

蔡英文總統は、式典の挨拶において次のように述べている。

本日は二二八事件から七〇周年にあたる日です。この数日、私は、ある人を思い起こしています。ある人とは、

張炎憲先生です。私の挨拶の冒頭は、とりわけ天国にいる張先生に捧げたいと思います。張先生は、生前、二二八事件において「被害者がいるのみで、加害者がいない」という状況を変えなければならぬと、ずっと強く望んでいました。本日ここに立ち、私は、張先生ならびにここにいる受難者の家族の方々に伝えたい。我々は、先生の未完の事業を引き受け、さらに前進していくということを。先週の土曜日、文化部が「中正紀念堂」の改革構想を打ち出すとともに、国史館も新たな二二八関連の史料集を発表し、そこには新たに発見された檔案も収録されています。各機関の協力のもとで、国家檔案局に移管された二二八事件の檔案は、すでに全部の機密解除が完了しています。和解は真相究明の上で行われなければなりません。明日、国家檔案局もまた新たな政治檔案の整理計画を始動します。ここで私は特に強調したい。我々は、最も謹慎な態度をもって、二二八事件の責任帰属問題を処理します。……移行期正義の目標は和解であり、闘争のためではありません。これは政府が堅持する原則です。移行期正義は、各個人の努力が必要です。すべての人民が共に過去に向き合うことができましたら、国家全体が一体となって未来に向かうことができます。……私は、いつか真相が完全に明らかにされ、加害者が謝罪を望み、受難者とその家族が謝罪を受け入れ許す日が来ることを、そして、毎年の二月二十八日が、国家が最も団結する日となることを願います。……<sup>(2)</sup>

このように、蔡英文總統は、蒋介石を二二八事件の元凶と指摘した『二二八事件責任帰属研究報告』（二二八事件紀念基金会、二〇〇六年）及び『二二八事件辞典』（国史館・二二八事件紀念基金会、二〇〇八年）等の著作がある張炎憲の二二八事件においては「被害者がいるのみで、加害者がいない」という言葉を引きながら、かかる状況を打破しなければならぬとして、二二八事件の責任帰属問題を政府として取り組んでいく姿勢を打ち出した。

それは、移行期正義の目標が和解にあり、和解を成し遂げる前提として「真相」が明らかにされなければならないからであった。

薛化元によれば、移行期正義とは、基本的には非自由民主体制から自由民主体制へと変更した後に行う過去の歴史に対する再評価である。移行期正義は、真相への需要、正義の追求、和解への希望の三つの側面があり、真相を究明することで、真の正義が現れ、正義によって実質的な和解を達成することができる。薛化元は、二二八事件の根本的問題として「執政者が国家を代表して受難者に対し謝罪し、賠償(補償)したが、真相への追究が不足していることにある。加害者を明らかにしなければ、正義を追求することができないにもかかわらず、台湾では、根本的な真相が解明されていないまま、簡単に和解的状态を作ってしまったこと」を指摘している。<sup>3)</sup>

これまで台湾において進められてきた、あるいは現在進行形で進んでいる移行期正義のための政策に基づき二二八事件に関わる公文書の公開が進んだことと、二二八事件の歴史的重要性により、二二八事件については膨大な研究の蓄積がある。<sup>4)</sup>このような状況のなかで、本稿は、これまであまり着目されてこなかった二二八記念碑に焦点をあてて、記念碑から移行期正義や族群和解の問題を考察したい。主として一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて台湾各地に二二八記念碑が建立されていくが、これらの記念碑に込められた思想は、移行期正義や族群和解の考え方、及び「根本的な真相が解明されていないまま、簡単に和解的状态を作ってしまった」という二二八事件の根本的な問題とどのように繋がっているのだろうか。

かかる問題意識のもとで、本稿では、二二八記念碑が建立されていく前提となる二二八事件の背景、経緯、社会的影響、二二八和平運動の展開を押さえた上で、いくつかの記念碑をとりあげて碑文の内容を検討する。

## 一、二二八事件の背景と経過

二二八事件は、偶発的事件であるも、総体的にみると、この種の事件が発生する蓋然性は極めて高かった。一九四五年八月、日本の敗戦、無條件降伏の報は、いわゆる台湾本省人を歓喜させた。それは、植民地の桎梏からの解放と祖国への復帰を意味したからである。本省人は、大陸から派遣されてきた接収軍を熱烈に迎えた。しかし、その祖国復帰への熱情は、さほど時日を経ないうちに急速に冷却され、失望に変わっていく<sup>6)</sup>。そこには、主として次のような背景があった。

一九四五年九月一日、台湾省行政長官公署と台湾省警備司令部が成立し、陳儀が行政長官に就き、警備総司令を兼任した。行政長官は、行政権、立法権、司法権を有していたことから、陳儀は、この三権に加えて軍事権も掌握したことになる。行政長官公署体制は、大陸の制度とは異なるだけでなく、事実上、日本統治期の総督府体制と何等変わるところがなかったのである。この体制は、本省人をして祖国が自分達を平等に扱わないものとして認識させた。さらに長官公署の部長、各県市の長官、国営企業や工場の幹部はほぼ外省人に占められた。日本の植民地統治からの解放により、本省人は、より多くの政治参加への機会が得られるものと期待していたが、それは見事に裏切られたのである。

一九四六年一月、国民政府は、「日産」（日本人が残した資産）と本省人資産の処理方法を定めた。これによると、本省人の私産は、一旦政府にすべて接収保管され、日本軍の特務に従事した、あるいは日本軍に協力して本国人を凌辱したなどの経歴がないことを証明して、はじめて返還された。すなわち、本省人は、日本人の侵略の手先とみ

なされたのである。かかる差別的待遇は、国民政府の本省人に対する基本的態度を示すものであるとともに、本省人にとって侮辱以外のなにものでもなく、その自尊心を著しく傷つけた。そして本省人私産ならびに日産処理過程における不当な占有と汚職などに代表される官紀腐敗の常態化、経済政策の失策によるインフレの進行と物価高騰なども加わり、本省人の国民政府への不満は、募るばかりであった。本省人と外省人は、日本統治の五〇年間、長期にわたり隔離されており、すでに言語は不通であり、教育背景や生活習慣もまたことなっていた。本省人の外省人への理解不足だけではなく、外省人の本省人へのより深刻な理解不足と殊更な差別待遇は、相互理解の促進をより困難にさせた。そのような背景のなかで二二八事件は発生したのである。

二二八事件とは、いわゆる台湾の本省人にとって、共通の悪夢であり、それに続く「白色テロ」の時代への序章でもあり、今なお多くの人々の心の傷として深く刻み込まれている悲劇的事件である。二二八事件の進行は、基本的に二つの段階に分けられる。第一段階は、一九四七年二月二十八日から三月八日までであり、第二段階は、三月八日より五月一六日までである。

二月二十七日、専売局台北分局の取締員傅学通ら六名と台北警察隊の警官四名が闇煙草を取り締まるため、大平町(現延平北路)に赴き、闇煙草を密売していた林江邁の煙草と売上金を没収した。小競り合いのなかで、林江邁は殴打されて負傷した。それを目撃していた周囲の人々は憤激し、騒動は拡大した。傅学通による威嚇射撃が通行人に命中し(翌日死亡)、騒動はもはや收拾不能となり、取締官らは派出所へ逃げ込んだ。群衆は、即刻犯人の引き渡しを要求するも認められず、その怒りはますます増大した。

翌二八日、民衆は、デモ行進を挙行、まず大平町派出所を破壊したのち、専売局台北分局で犯人の厳罰を要求し、拒否されると、行き先を行政長官公署(現總統府)に変更し、陳儀に陳情しようとした。デモ隊は、約四・五〇〇

人に膨れあがり、ますます勢いを増していった。公署の前にはすでに警備兵が配備されていたが、これら兵士が突如として群衆に向けて一斉掃射を始め、多数の死傷者を出した。民衆は、台北公園（現二二八和平紀念公園）に集まり、台湾放送局を占領し、全島へ向けて放送を開始、台湾人は暴政に抗して決起するよう呼びかけた。かくして台北市での衝突は、全島挙げての政治抗争へと発展していったのである。これより三月八日にかけては、駐在する軍隊、憲兵、警察が全島的な民衆蜂起を鎮圧できず、双方に死傷者を出し、かつ台湾に居合わせた外省人が時在路上で報復の対象となった時期であった。

三月二日、事件の解決をはかるために、民意代表、国民大会代表、省市参議員等からなる「二二八事件処理委員会」が台北に組織され、その後、各県市にも分会が設立された。処理委員会は、七日、王添灯を通じて政府に対して四二箇条の要求を提出した。そのなかには軍事方面に対する要求として、「大陸の内戦が終結する以前において、台湾を防衛することを目的とする以外、台湾を内戦に巻き込ませないために、徴兵には絶対に反対すること」や「軍事権の濫用を取り除くため、警備司令部を撤廃すること」があげられた。のちに政府は、この要求項目を国家反逆への重要証拠とみなし、処理委員会関係者をことごとく連行・殺害していく。

三月八日、大陸の国民政府が派遣した第二師団が基隆港に上陸するや状況は一変した。すなわち、二二八事件の第二段階の始まりであり、ここからがまたいわゆる「二二八大虐殺」の始まりでもあった。二二八事件処理委員会は、行政長官公署との交渉談判役を担ったが、陳儀行政長官は、表面上、該委員会の要求に応じるように見せかける一方で、蒋介石に打電して軍の派遣を要請していた。上陸軍は、基隆でただちに街路掃射・密集掃射を開始した。九日、陳儀は、戒嚴令を布告し、一〇日、非合法たる二二八事件処理会の解散を命じた。一日には、車内での民衆と兵士との衝突を発端とする「八堵火車站事件」が起こり、史国華率いる約四〇名の部隊が八堵駅を襲撃し、

多くの駅職員が射殺または連行後殺害された。一八日より国民党軍は、東西の二路に分かれて掃討作戦を展開し、台東で合流して全島を掌握しようとした。農村部に潜む「反政府的分子」を一網打尽にする「清郷」が実施され、多数の無辜の人々が受難した。五月一日、陳儀は、台湾を離れ、一五日、魏道明が來台し、一六日、行政長官公署を廃止してこれを組み入れた台湾省政府の主席に就いた。魏道明は、同日、戒嚴令を解除し、ここにおいて二二八事件は、一つの区切りを迎えたのである。かかる二二八事件による受難者の総数は、過去の政府刊行物によると七千人以下といわれる。だが、行政院が歴史研究者を招聘して組織した「二二八事件小組」の研究成果である「二二八事件研究報告」(一九九四年)は、一万八千人から二万八千人のあいだと推計している。

## 二、二二八和平運動の展開

二二八事件の中で命を落とした者の中には知識人、社会的エリート、働き盛りの青壮年者が多く含まれていた。台湾近代史のどの側面を研究したとしても、優秀な人材が二二八事件に飲み込まれてしまったことに容易に気づかされる。二二八事件の台湾社会に与えた衝撃は、無数の社会的エリートと青壮年を短期間で一挙に喪失したことであった。さらに生き残った多くの台湾人知識人は、爾後、政治に関与することを避け、その子女にも政治への不干渉を強く望むことになった。二二八事件は、まさに台湾民主政治史上の一大断層を形成させたのであり、台湾社会の沈滞化と「脱道徳化」(demoralized)を進展させたのである。周婉窈の次の問題提起は、我々の想像力を刺激するに足るものである。いわく「一個の社会が突然のうち、多くの名士や文化的エリートを失ってしまったとしたら、それがもたらす後遺症はいったいどのようなものになるだろうか」と。<sup>7)</sup>

その一方で、二二八事件に関わつた台湾人知識人あるいはその受難者の家族の一部は、国民政府への怨嗟から、政府の転覆運動に従事し、その後の台湾独立運動の先駆けとなった。政府のブラックリストに名を連ねた知識人は、香港、日本、欧州、アメリカなどに逃れ、各地で反政府活動に携わり、台湾独立を鼓吹していく。また国民政府に失望した一部の知識人は左傾化していき、国民党が中共に駆逐され台湾に逃れてきたのち、戒厳令下での「白色テロ」の犠牲者となった。このほか、二二八事件は、本省人と外省人間の亀裂をさらに深めることになった（いわゆる「省籍問題」）。本省人の婚姻上、就業上での外省人の排斥が進行した。この両者の感情的対立は、一九七〇年代になり次第に取り除かれていくのである。<sup>8)</sup>

一九四九年五月二〇日、政府は、台湾全土に戒厳令を布告し、同年六月、「懲治反乱条例」および「肅清匪諜条例」を施行し、同年末には国民政府が台湾に全面撤退した。一九五〇年代から一九六〇年代の戒厳時期では、この二つの条例に依拠し、共産党のスパイを取り締まることを名目として、無実の人々を連行、処刑する「白色テロ」が横行した。「白色テロ」による処刑者は、約四千人におよび、約八千人が逮捕収監されたといわれる。<sup>9)</sup>

戒厳令は、一九八七年七月一五日に解除された。前年九月にはなお党禁が解除されていない状況下で、民主進歩党が成立しており、民主化の兆しがようやく見え始めた。折しも一九八七年は、二二八事件四〇周年にあつた。二二八事件に触れることは、戒厳令下で禁忌であつた。だが、同年二月二八日を前後して、それを突破する重要な動きがあつた。二月四日、二二八和平日促進会が組織された。促進会の設立趣旨は、事件の真相究明、冤罪をすくこと、二月二八日を和平の日とすることであつた。促進会は、台湾各地で活動を催し、台湾民衆の熱烈な支持を得、二八日、台北市において、四〇年来はじめての二二八受難者の慰霊儀式を挙行した。同日にはまた民進党中央党部が二二八事件の発生地である延平北路附近の永樂小学校で「二二八和平日演講会」を開催し、三万人あまり



の民衆を動員した。二二八和平日促進会は、一九八九年一月より台湾人權促進会や台湾基督教長老教会などと連合して「二二八公義和平運動」を展開した。これには、仏教団体、学生団体、民進党も参加した。この運動の高まりは、政府の譲歩を引き出した。<sup>10)</sup>

一九九五年二月二八日、李登輝總統が台北市新公園(現在の二二八和平公園)における二二八紀念碑の除幕式に参加して談話を発表している。そのなかで、「国家元首として、政府が犯した罪について事件の犠牲者と遺族に対して深く謝罪する」と初めて公式に謝罪の意を示すとともに、二二八事件の真相究明、受難者に対する補償、二二八紀念日の設立を約束した。二二八紀念碑について、二二八紀念碑は、怨恨や悲しみが込められたものではなく、歴史の警鐘であり、絶えず我々が歩んだ歴史的悲劇を思い出させるものとして、絶えず「族群」(エスニックグループ)の分裂を誠告するものとして存在するものであると述べ、族群の融合による新台湾の建設を強調した。そして、談話の最後で、歴史上の悲しみや苦難の記憶は、今後我々の心中の陰となることはなく、我々の輝かしい前途を切り開くための力になるとし、二二八紀念碑は、台湾の民主化、自由化の象徴である、として談話を結んでいる。<sup>11)</sup>李登輝は、本省人を弾圧した国民党政府関係者と国民政府軍の実行者に対する責任を問わず、未来志向で族群の和解を達成するという姿勢を示したといえる。二二八紀念碑は、そのための象徴と位置づけられたのである。

その後、李登輝の約束どおり、受難者の名誉回復、記念公園の整備、記念館の設立、「二二八事件処理及補償条例」の公布(一九九五年四月)、及び二月二八日の国定休日化(一九九七年二月)が達成された。<sup>12)</sup>

### 三、二二八紀念碑と「族群」和解

二二八紀念碑は、二二八和平運動の展開の一環であった。二二八紀念碑の第一号は、一九八九年八月一九日に嘉義市弥陀路忠義橋附近に建立された「嘉義市弥陀路二二八紀念碑」である。当時、政府は、なお二二八事件を禁忌とみなしており、この建碑行動を許可しなかったばかりか、設計者の詹三原を拘束・収監した。しかし、張博雅嘉義市長および市民の支持のもと、ついに歴史の傷を癒し、永遠の平和を希求する二二八紀念碑が建立された。<sup>13)</sup>

管見の限り、現在確認できる台湾における二二八紀念碑は、次の「二二八紀念碑一覽表」で示した二十七基である。二二八紀念碑は、台湾各地に建立されており、一九九〇年代から二〇〇〇年代に多く建立されている。最も新しいものは、二〇一六年に宜蘭県頭城鎮慶元宮前広場に建てられた二二八事件受難者紀念碑である。

二二八紀念碑の特徴は、明確な責任の追及がないということである。そこに刻まれた碑文によれば、いずれの紀念碑も受難者の慰霊とその遺族の安寧を建立目的として、二二八事件を歴史的教訓とし、族群の団結と調和をもつて未来に歩んでいくことを強調している。ここで、高雄市、新北市、基隆市にある二二八紀念碑を事例としてとりあげて碑文の内容をみていくことにしたい。

次の第一図は、一九九三年二月二八日、高雄市の二二八和平



第一図 高雄市二二八紀念碑  
(出典) 筆者撮影 (2013年1月8日)

## 二二八紀念碑一覽表

番号	建立年月日	碑名	設置場所
1	1989. 8.19	嘉義市弥陀路二二八紀念碑	嘉義市弥陀路忠義橋附近
2	1992. 2.28	屏東県二二八紀念碑	屏東市中山公園南側
3	1993. 2.28	高雄市二二八紀念碑	高雄市鼓山区鼓山区寿山二二八和平公園内
4	1993. 2.28	高雄県二二八紀念碑	高雄市岡山区碧紅里和平公園内
5	1993.10	台南市二二八紀念碑	台南市建平路台南市政中心西側緑地
6	1994. 2.28	屏東県林边郷二二八紀念碑	屏東県林边郷河浜公園内
7	1994. 7.16	八堵站罹難員工紀念碑	基隆市台湾鉄道八堵駅附近
8	1995. 2.28	台北二二八紀念碑	台北市二二八和平公園
9	1995. 6.15	台中市二二八紀念碑	台中市東峰公園
10	1996. 2.28	台南県二二八紀念碑	台南市新営区綜合体育場
11	1996. 2.28	嘉義市二二八紀念碑	嘉義市二二八紀念公園
12	1996. 2.28	嘉義県阿里山郷二二八紀念碑	嘉義県阿里山郷公所
13	1997. 2.28	花蓮県關懷二二八紀念碑	花蓮市北浜公園
14	1998. 2.28	二二八事件引爆地紀念碑	台北市南京西路 183 号
15	1999. 2.28	湯徳章紀念碑	台南市湯徳章紀念公園 (台南文学館対面)
16	1998. 2.28	桃園県蘆竹郷中福村二二八紀念公園	桃園県蘆竹郷中福村二二八紀念公園
17	2000.11.14	雲林県古坑二二八紀念碑	雲林県古坑郷崁脚村公墓
18	2001. 2.28	台中県二二八紀念碑	台中市大里区国光公園
19	2001. 5.30	静宜大学二二八紀念碑	台中市沙鹿区大肚山麓静宜大学内
20	2002.11.28	三重市二二八紀念碑	新北市三重区二二八和平公園
21	2003. 2.28	基隆市二二八紀念碑	基隆市中正公園
22	2004. 2.28	新竹市二二八紀念碑	新竹市親水公園
23	2004. 2.28	宜蘭二二八紀念碑	宜蘭運動公園
24	2004. 4.29	南投二二八紀念碑	埔里愛蘭橋
25	2006.11.13	高雄市二二八和平紀念碑	高雄市鹽埕區中正四路 二二八和平紀念公園
26	2007. 3.10	埔頂二二八蒙難紀念碑	新北市淡水区私立淡江高級中学
27	2016. 2.26	宜蘭縣二二八事件受難者紀念碑	頭城鎮慶元宮前廣場

(出典) 『台湾二二八紀念碑図集』(阮朝日二二八紀念館、2004年)を基に筆者が作成

公園内に建立された高雄市二二八和平記念碑である。

この記念碑は、正面に「高雄市二二八記念碑」と刻まれ、右側面と左側面にも碑文が刻まれている。右側面の碑文には、「二二八事件の概略が述べられたのち、「民族の傷は、早急に療治しなければならない」として、「各族群間の調和、さらに全人類の共存共栄のために、愛をもってねたみ合いを取り除き、愛をもって相互に抱擁し、もって公義を永遠にわが郷土にとどめおき、万世平和を祈念す」と刻まれている。そして、左側面の碑文は、記念碑の設計について触れており、「高雄市二二八和平記念碑という字体を正面に刻み、「二二八」を主題として体現し、両円の重なり合う台座は、和睦円満を象徴し、本体は、八卦型を採用して永遠の団結の願いを込めた」とある。<sup>14)</sup>

次の第二図は、二〇〇二年一月二十八日、新北市三重区二二八和平公園内に建立された「新北市三重区二二八記念碑」である。



第二図 新北市三重区二二八記念碑  
(出典) 筆者撮影 (2013年1月11日)

記念碑の正面台座には、碑文の刻まれたプレートがはめられている。碑文には、上述の高雄市二二八記念碑と同様に、二二八事件の概略が書かれたのち、最後に「社会の大きな傷を癒すには全人民の協力と努力に頼る必要がある。ここに事件で亡くなった人々を慰霊し、受難者とその遺族の悲憤を慰め、国民に歴史の教訓として記念碑を建立する。自今、われらは一体となり、互いに愛をもって助け合い、誠実をもって接し、深い憎しみと恨みを無形と化し、永遠の平和を祈念する。天祐の宝島が永久に栄えんことを」と刻まれている。<sup>15)</sup>



第三図 基隆二二八紀念碑

（出典）筆者撮影（2013年1月12日）

最後に、次の第三図は、二〇〇三年二月二十八日、基隆市中正公園内に建立された「基隆二二八紀念碑」である。

紀念碑の台座に刻まれた碑文には、「今ここに中正公園の高峰に紀念碑を建てる。それは、広大な太平洋に對面し、我々の受難者に對する追悼の念を表すものであるだけでなく、調和、公正、光明の來臨を象徴するものである。台灣人民が當時の特殊時局を体認し、寛恕、平和の心情をもってこの歴史の傷を慰め、よりよい未來へ向けてともに手を携えて進むことを期待する」とある。<sup>16</sup>この基隆市二二八紀念碑は、蒋介石を記念する公園である「中正公園」内に建

られているところが興味深い。二二八事件の責任者である蒋介石の記念公園内に二二八紀念碑を置く意味をどのように解釈すべきだろうか。

台湾の人々は、「当時の特殊時局を体認」して、事件の責任の所在を追及せず、これを「寛恕」の心あるいは「愛」をもって許すことで、族群間の「和解」を達成するよう求められた。事件の責任の所在及びその眞実を明らかにせずして、よりよい未來に向けてともに歩むことができるのだろうか。

おわりに

これまで、二二八事件の背景、經過、社会的影響、二二八和平運動の展開を踏まえ、二二八紀念碑の碑文に込め

られた思想を検討してきた。

二二八紀念碑から移行期正義や族群和解の問題を考えた時、次の二つの事柄を指摘できる。第一に、二二八紀念碑には、被害者たる「本省人」と加害者たる「外省人」の妥協し得る最低限度の条件下での和解のモデルが示されている、ということである。そのため、二二八事件の歴史清算は、平和を願う心だけではなく、寛恕の心あるいは愛をもって「族群」の団結と調和をはかることを、いわば「強制」され、和解的状态に置かれた受難者とその家族らの心の傷が真に癒される日まで続けられていくことになる。」「真相」の究明は、それを成し遂げるための重要な手段である。第二に、それゆえ、二二八紀念碑は、「根本的な真相が解明されていないまま、簡単に和解的状态を作ってしまった」という二二八事件の根本的問題の深まりを助長させるものとして機能していたのではなからうか。

本稿は、二二八事件と移行期正義や族群和解という問題を紀念碑から考察するという試みであったが、初歩的な検討を行ったに過ぎない。二二八紀念碑の研究をより深めていくためには、台湾各地に作られた二二八紀念碑の設置主体と建立の過程を詳らかにして、地域の特性を明らかにすること、これらの紀念碑が慰霊式典や教育上において実際にどのように活用されてきたのか(活用されているのか)を明らかにする必要がある。今後の課題としたい。

註

(1) 二二八事件紀念基金會「時代在眼前 二二八70周年中枢紀念儀式」二〇一八年一〇月二六日 ([https://www.228.org.tw/list\\_memorialevent-view.php?ID=60](https://www.228.org.tw/list_memorialevent-view.php?ID=60))、二〇一九年二月二八日閲覧。

- (2) 同上。
- (3) 薛化元(訳・李為楨・東山京子)「二二八事件をめぐる歴史清算問題」『中京法学』第五一卷一・三号、二〇一七年、一五五頁～一七五頁。
- (4) 例えば、廖繼斌総編輯／蔡秀美主筆『二二八事件文獻目錄解題』(財団法人二二八事件紀念基金会、二〇一五年)参照。
- (5) 二二八紀念碑そのものを取りあげた研究は少ないが、例えば涂嘉倫「當代台灣紀念碑研究：以二二八紀念碑為例」(國立台南藝術大學藝術史學系修士論文、二〇一二年)がある。
- (6) 以下、二二八事件の背景と経過についての記述は、黄秀政・張勝彦・吳文星『台灣史』(五南、二〇〇二年、二四五頁～二五五頁)による。
- (7) 周婉筠(濱島敦俊監訳、石川豪・中西美貴訳)『國說台灣の歴史』平凡社、二〇〇七年、一八二頁。
- (8) 黄秀政・張勝彦・吳文星『台灣史』前掲、一五六頁。
- (9) 吳密察監修、遠流台灣館編著、横澤泰夫日本語版編訳『台灣史小事典』中国書店、二〇〇七年、二三六頁～二三七頁。
- (10) 二二八事件紀念基金会「二二八平反運動紀要」([http://www.228.org.tw/288\\_redress.html](http://www.228.org.tw/288_redress.html))、二〇一九年三月一五日閲覧。
- (11) 中華民國總統府「總統在二二八講話 中華民國八四年二月二八日」(<https://www.president.gov.tw/NEWS/22573>)、二〇一九年三月一五日閲覧。
- (12) 注10同。
- (13) 柳照遠「二二八紀念碑」(張炎憲主編『二二八事件辭典』國史館・二二八事件紀念基金会、二〇〇八年)、一九頁。
- (14) 高雄市二二八和平紀念碑の右側面と左側面の碑文及び碑の右横に添えられた説明板の日本語訳は次のとおりである。
  - (一) 高雄市二二八和平紀念碑(右側面)
  - 高雄市二二八和平紀念碑文

第二次世界大戦の終結により日本は降伏し、国民政府は、民国三四(一九四五)年一〇月台湾を接收した。初代台湾省行政長官陳儀は、民情への理解に欠け、民衆とのあいだの誤解は日増しに深まり、衝突事件がしばしば

生じた。民国三六（一九四七）年二月、ついに二二八事件が発生し、台湾各地で甚大な死傷者を出した。本市参議員および士紳は、この解決の道を探るべく、事件処理委員会を組織した。三月六日、代表者六名が寿山の高雄要塞司令部（司令彭孟緝）に赴き請願を行った。しかし、不測の事態に巻き込まれ、請願代表のうち三名が相次いで寿山軍事基地で殺害された。事態は、さらに拡大し、不幸にも高雄市政府、高雄駅で多くの死傷者を出した。民族の傷は、早急に療治しなければならぬ。事件により死亡した人々を記念するため、高雄市民が協力してここに碑を建立した。天地をもって心とし、山河をもって鏡とし、子々孫々までこの歴史の教訓を心に刻み、二度と同じ悲劇が繰り返されんこと、そしてすべての事件の受難者とその家族および友人が苦しみの桎梏から解放され、内心に不当に蓄積された鬱滞を除去されんことを願う。各族群間の調和、さらに全人類の共存共栄のために、愛をもってねたみ合いを取り除き、愛をもって相互に抱擁し、もって公義を永遠にわが郷土にとどめおき、万世平和を祈念す。

高雄市二二八和平紀念碑籌建委員会 謹立

中華民國八二（一九九三）年二月二八日

(二) 高雄市二二八和平紀念碑（左側面）

高雄市二二八和平紀念碑誌

民国三六（一九四七）年に発生した不幸な二二八事件は、台湾歴史上の傷跡である。その傷を癒すため、本市府会、工商・宗教・學術各界と地方名士諸氏は、その意を体し、和平紀念碑の建立を計画し、民国八〇（一九九一）年夏、建設準備委員会を設立した。

建設準備委員会は、多くの場所を視察し、風水が極めて佳良な寿山を選んで建碑することに決した。該碑は、イタリア滞在の彫刻芸術家屠国威氏の設計にかり、イタリアの大理石を彫ってつくられた。高雄市二二八和平紀念碑という字体を正面に刻み、「二二八」を主題として体現し、両円の重なり合う台座は、和睦円融を象徴し、本体は、八卦型を採用して永遠の団結の願いを込めた。そして、碑周辺を整備し、雄大なる景觀を形作り、非のうちどころのないみごとな創作と称されている。民国八一（一九九二）年二月二七日に起工し、一九九三年二月



二八日に落成した。

この地は、険要の地で、俗世の喧騒から遠く離れ、寿山の緑したたる緑蔭を背後におく。全市内を俯瞰でき、元亨寺の暮れ方の太鼓と明け方の鐘が鳴り響き、愛河の雄大な流れもあり、壮麗で変化に富む。既往を懐かしむため多くの人々がここに足を運ばれることを願う。

市長 吳敦義 謹識

中華民國八二(一九九三)年二月二八日

(三) 高雄市二二八和平紀念碑右横の説明板

高雄市二二八事件紀念碑建立沿革

高雄市政府は、二二八受難者の霊を慰め、受難者遺族の長期にわたる心中の痛み取り除き、ともに手を携えてこの悲しみに太陽の光を注ぎ込むため、民国八一(一九九三)年二月二八日、二二八和平紀念碑を寿山に建てた。その後、事件の史料が次第に公にされ、かつ紀念碑の位置も市街地より遠く、敷地もまた狭いので、愛河仁愛公園内に新たな紀念碑を建立する計画がたち、民国九五(二〇〇六)年九月二日に起工、同年一月初めに竣工し、同月二〇日落成式が挙行された。寿山の紀念碑は、段階的な歴史の意義を持つものとして、なお原地に保留された。

仁愛公園二二八紀念碑は、現代的な設計方式を採用入れ、主碑は、人体工学的観点に適合するよう設計され、事件の顛末が刻まれている。受難者の姓名を刻んだ記念壁の周辺には緑したたる樹木が添えられ、人々を記念広場に導く。それらは、永久の和睦円融と団結を象徴する。

高雄市二二八和平紀念碑重建委員会 謹立

中華民國九五(二〇〇六)年一月二三日

(15) 新北市三重区二二八紀念碑の台座プレート碑文の日本語訳は次のとおりである。

二二八紀念碑碑文

一九四五年、日本の敗戦、投降の報が伝来すると、万民は、歡喜に湧き、不義な植民地統治からの脱却を慶賀し

た。だが、台湾の接収と治政の重任を担った台湾省行政長官陳儀は、民情を解せず、その施政は偏頗で台湾人民を差別した。さらに官紀は腐敗し、経済不況、物価高騰、失業もまた深刻であり、民衆の不満は沸点に達した。一九四七年二月二七日、専売局職員が台北市延平北路で閩煙草の取締を行い、女販売人を負傷させ、さらに道行く人を誤って射殺した。民衆は激怒し、翌日台北の群衆はデモを行い、行政長官公署に赴き、犯人の処罰を要求したが、不意に一斉掃射に遭い、多数の死傷者を出した。これが台湾全土への抗争拡大の導火線となった。この争いを解決し、積怨を晴らすために、各地の士紳は、事件処理委員会を組織し、中に立って両者の協調と政治改革を訴えた。陳儀は、それに協力するとみせかけて、士紳を「奸匪叛徒」（叛乱分子）とみなし、南京に派兵を請うた。国民政府主席蔣中正は、報に接するとすぐに台湾への派兵を決定し、三月八日、第二十一師団が劉雨卿師団長の指揮のもとで基隆に上陸した。一〇日、台湾全土に戒嚴令が布かれ、警備総司令部參謀長柯遠芬、基隆要塞司令史熹、高雄要塞司令彭孟緝、および憲兵団長張慕陶らが清郷（地方や農村の反政府の人士）を鎮圧した際、無辜の人達も連座し、数ヶ月の間に死傷、失踪者は数万人にのぼった。そのなかでも基隆、台北、嘉義、高雄がとりわけ惨状を呈した。世に言う二二八事件は、その後半世紀近くの長期にわたる戒嚴令下において、口をつぐんで語られることなく、一つの禁忌となった。だが、積もりに積もった冤罪の鬱憤は、省籍矛盾や統独問題として立ち現れた。一九八七年戒嚴令解除後、各界は、安定的な平和を強く望み、二二八事件の調査研究を進めた。そして国家元首の謝罪を経て受難者とその遺族への補償が進展し、記念碑の建立も行われた。社会の大きな傷を癒すには全人民の協力と努力に頼る必要がある。ここに事件で亡くなった人々を慰霊し、受難者とその遺族の悲憤を慰め、国民に歴史の教訓として記念碑を建立する。自今、われらは一体となり、互いに愛をもって助け合い、誠実をもって接し、深い憎しみと恨みを無形と化し、永遠の平和を祈念する。天祐の宝島が永久に栄えんことを。

財団法人二二八事件紀念基金会

謹立

中華民國九一（二〇〇二）年一月二八日

(16) 基隆二二八紀念碑の左横に置かれた説明板と碑台座に刻まれた碑文の日本語訳は次のとおりである。

(一) 説明板

二二八和平記念碑設計説明

エリートの鮮血の昇華

円満、調和、円融などを含意する「円」をもって二二八記念碑建碑の意義を解説する。記念碑および景観は、ひとしく「円」をもって基本型として構築されている。その寓意は、次の二点である。

一、黒色鑄銅の円柱台座…

受難者に対する無限の追想、哀悼を表す。台座には碑文を刻み建碑の精神と意義を記す。

二、ゆったりと回転、融合して昇っていく螺旋…

円柱台座から昇っていく螺旋は、二二八受難エリートの鮮血が昇華したのちの思いを表す。それは不断に光と熱を発し、社会の心を照らして光輝く社会を再建し、人格を回復するための礎石である。そして歴史の真相を認識したうえで、陰影から抜けだし、寛容の心を持ち、早逝した英霊を慰め、調和・団結した、公正な社会を創造することを期すものである。

(二) 碑文

基隆市二二八和平記念碑文

太平洋戦争が終結し、台湾は植民地統治から離脱した。国民政府は、台湾を接収した。治台政策の誤り、初代台湾省行政長官陳儀の民情を顧みない態度に加えて、官紀の腐敗、特権の横行により、需給のバランスは崩れ、物価は高騰し、台湾人民の生活は困窮を極め、怨嗟の声はいたるところにあふれた。

一九四七年二月二十七日、台湾省専売局職員が台北市大稻埕で闇煙草の取締を起こつた際、女販売人を殴打負傷させ、かつ抗議市民を射殺した。翌二八日民衆は、台湾省行政長官公署に請願デモを行うも機銃掃射に遭つた。

これを契機として、民衆の蜂起は、全島に広がり、ここに「二二八事件」が発生した。三月八日、国民政府が鎮圧のために派遣した第二師団が基隆に上陸し、小銃と機銃で民衆を射撃し、多数の死傷者を出した。三月一〇日の明け方、部隊は、本市各地で一軒一軒戸口捜査を行い、各戸の壮丁を強行的に連行した。三月一日、八堵

駅の駅職員を射殺した。そして基隆港の波止場、田寮港の運河、社寮島、旧市街元町派出所の後ろの海面には惨殺された無辜の民衆の死体が漂ったが、これは統治者が基隆市民を無差別的に殺害した証である。

今ここに中正公園の高峰に記念碑を建てる。それは、浩瀚な太平洋に對面し、我々の受難者に對する追悼の念を表すものであるだけでなく、調和、公正、光明の來臨を象徴するものである。台湾人民が當時の特殊時局を体認し、寛恕、平和の心情をもってこの歴史の傷を慰め、よりよい未來へ向けてともに手を携えて進むことを期待する。

基隆市長 許財利

基隆市二二八關懷協會 謹誌

中華民國九二（二〇〇三）年二月二十八日